

【指揮者、合唱歌手の為の合唱アンサンブル基礎講座】

講師：藤井 宏樹（本学特任准教授）

第一部

「より良い合唱アンサンブルを実現する為に」

藤井 宏樹 特任准教授。
会場の左端から右端まで移動し、身体も目一杯使いながら、
受講者が理解しやすいように解説。
准教授の熱い指導に引き込まれるように
受講者の皆さんも熱心に聴講されていました。



第一部は、藤井宏樹特任准教授自身が、本学や、またそのほかの教育機関、団体等において合唱指導、レッスン、基礎的なトレーニングを行う際に活用するノウハウを当講座受講者に解説し、理解を深めてもらおうとする内容であった。

まずは「声」という楽器について、その仕組みを受講者とともに考察した。最初に、「うたう・声を出すことの一いちばんのモチベーションとなるのは、『嬉しい』『楽しい』などの気持ちであり、その気持ちを維持させるためにも、技術的な説明はできるだけ簡単なほうがいい。これは、子どもに指導する場合はもちろん、大人も同様」と提案し、子どもを指導する場合にも理解してもらいやすい説明を紹介した。

「声」という楽器の音が出る仕組みを、ピアノの音が出る仕組みと照らし合わせ、ピアノの「ハンマー」の役割を担うのは「息」であり、「弦」に該当するのは「声帯」であり、「響板・フレーム・側板等で囲まれる空間」と同じ働きをするのは「口腔・鼻腔」であること。また、人は口腔の容積・形状を意図的に変えられる。これが、言葉を生み出せる理由であり、ほかの楽器ではなし得ない、「声」という楽器だけが持つ機能であること。声帯を使って出す音・使わずに出す音の違い……といったことを、受講者との質疑応答を繰り返しながら、解説した。

その後、受講者全員による発声練習が始められた。

2人一組、さらに3人あるいは4人一組になり、パートを分けた発声練習を行った。複数人数での発声練習の場合、相手となる人の声を聴き、相手の声をきちんと認識し、その声に合わせて自分の声を出すことが重要であると准教授が説明。「相手に活かされた自分の声を出す。自分一人の声で完結するのではなく、



複数の人とともに発声練習においては、相手の声を聴き、その声に合わせて自分の声を出すことが重要。
相手の声も自分の声も、耳でしっかり聴いて、より美しいハーモニーを生み出すように……!

相手と合わせた声で“結論”を出すよう意識しなければ、よいものは生まれない。ハーモニーを実感しながら。倍音を感じるように……」などアドバイスをしながら、発声練習を繰り返した。

「この練習を1～2カ月繰り返すと、合唱に参加する全員の声が随分変わる。また、ソロの方の場合も、ピアノという相手の音をよく聴き、ピアノの響きに活かされる自分の声を意識するようになると、想像力がよく働くようになり、自由に声を出せるようになる」(藤井特任准教授)

次に、言語発音(母音・子音)について解説された。子音に関しては、有声音・無声音の違い、摩擦子音・破裂子音・破擦子音の分類を受講者ともに考えながら整理していった。受講者の中には、説明の理解に少し時間を要したり、戸惑いをうかがわせる表情を浮かべる方もいたが、「子音の分解は細かいことではあるが、合唱で用いる『声』という楽器の理解を深めるためには、このことも知っておくほうがいい。他人と共通のものを自分も持っていて、その仕組みを客観的に理解することが、“人に活かされる合唱”に参加するうえで大切なことだから」との准教授の助言を支えに、隣席の方と確認し合ったり、メモを細かく取ったりしながら、受講者の方々は皆、熱心に准教授の説明を聞き入っていた。

第二部

「様々な合唱作品を取り上げながら合唱アンサンブルの実践」

第二部は、第一部で理解したことを踏まえたうえで、准教授の指揮のもと、受講者全員で合唱の実践を行った。

最初に取り上げられた楽曲は、W.A.モーツァルト作曲『Ave verum corpus (アヴェ・ヴェルム・コルプス)』。一度全員で合唱し、次に歌詞のリズム読みを行った。リズム読みを行う場合、意識しなければ発話するように音読する傾向にあることから、「リズム読みの際にも、歌声に近い形で発話するほうが効果的である」と、准教授は提案した。さらに、一つひとつの言葉の発音やリズム(母音アクセントか子音アクセントか)を確認し、全員が無声で(息だけで)歌うことなども試した。また、「楽譜記号からの解釈だけではなく、詞の言葉の意味や、楽曲の音の流れ・響きによる解釈も含め、歌うことを実践してほしい」と促し、再度、全体を通して合唱した。

その後、谷川 雁 作詞／新実徳英 作・編曲『南海譜』、続いて、高田敏子 作詞／信長貴富 作曲『夕焼け』と、邦人の作品を2曲取り上げた。日本語による詞であり、意味内容の理解、感情表現もしやすいため「楽曲が描く情景というものをイメージしながら歌ってほしい」ことを、加えて、やはり相手の声を聴くことの重要性を再度、受講者に語った。女性受講者の人数が男性受講者の人数を大幅に上回っていたことから、パートのバランスに偏りが生じているという状況のなか、「男声のボリュームに女声のボリュームを合わせることを、女声パートの皆さんが意識しないと、合唱としてよい響きにならない」ことを指摘。合唱とは複数の人によって作り上げられるものであり、状況に合わせた臨機応変な対応を求められることを全員で確認した。

『夕焼け』の合唱では、自身も合唱指導をされている受講者の方が准教授の指名を受け、その方の指揮に合わせ、他の受講者が合唱をすることも試みられた。

講座の最後には会場を広々と使い、准教授を半円形に囲むように受講者が並び、合唱を行った。演奏が終わり、ピアノ伴奏の余韻が残るなか、准教授が受講者に「素晴らしい」と声をかけると同時に、受講者の方々も准教授に、また隣り合う方にと、互いに拍手を送り合い、講座は終了した。



最後に、藤井特任准教授を受講者が囲むような形で『夕焼け』を合唱。准教授の指揮も、受講者の皆さんの歌声・ハーモニーも、この歌詞にある「夕焼けの色=ばらいろ」のように、情熱的でした。